



OKAYAMA
UNESCO HIGH
SCHOOL
NETWORK

岡山県ユネスコスクール
高校ネットワーク



PROJECT REPORT 2023



活動報告書



unesco

Associated Schools
Network

Table of Content

ネットワークについて

02

企画決定プロセス

06

事前学習会

09

実践交流会

10

海外から見たネットワークの実践

14

学生スタッフ活動報告

19

成果物：ニュースレター

22

寄稿：『ユネスコスクールの「味」』

37

岡山県ユネスコスクール 高校ネットワークとは

About Our Network

岡山ユネスコスクール高校ネットワークは、2014年11月に岡山市で開催された国連ESDの10年の最終年の会合「ESDに関する世界会議」「Student（高校生）フォーラム」の企画運営を、岡山市の当時のユネスコスクール加盟校が中心となって担ったことが契機で創成されました。

同フォーラムでは、約30ヶ国から200名近い高校生が集い、大学生のボランティアスタッフたちも高校生たちの主体的な運営を支えるように伴走しました。約2年かけて研修と準備を重ね、3日間にわたる充実したディスカッションと交流の結果、無事に生徒たちによる「ユネスコスクール世界大会 Student(高校生)フォーラム共同宣言」を提出しました。詳しい記録については[こちら](https://x.gd/studentforum)。https://x.gd/studentforum

この経験と宣言を次に伝えながら、生徒たち・教員が交流し、お互いの学校から学び合い、それぞれの学校の実践を発展させることを期待して、当時の先生方の提案によって、このネットワークが立ち上がりました。

2015年11月に第1回の実践交流会を岡山大学にて実施して以来、毎年幹事校が交替しながら、OBOGを含む学生スタッフと共に企画を進め、岡山市(RCE岡山)を始めとして多方面からの応援を頂きながら交流会を発展させられてきています。実践交流会で単発的な交流をするだけでなく、各学校でのESDの実践に学びを活かしたり、新たな繋がりが新たな共同的な活動へと発展したり、卒業生が教師となって活躍したりしています。

2020年以後はコロナ禍にあって、各学校での様々なESD・ユネスコスクール活動が中断される危機もありました。その様な中、オンラインを活用しながら交流を続け、2021年はSDGsカレンダーをブルガリアのユネスコスクールと共同制作し、2022年はエコ・プロダクツづくりのワークショップを実施しました。2023年には防災をテーマとして各学校が防災グッズ、関連するゲームなどの出展を行い、マレーシアの先生方や高校との交流も実現しました。

2024年現在、気候変動、災害、戦争、エネルギーなどの持続可能な開発の諸問題は複雑に絡み合いながらも、未だ多くの人にとっては解決の糸口がつかめないほどの壮大な（でも喫緊の）課題として迫ってきています。

このような時こそ、改めて、10年前の高校生フォーラムで海外の高校生と共に議論を重ね、提出された共同宣言文を振り返り、その意味と価値について考えていくことで今後の私たちの方向性が見えてくるのではないのでしょうか。

文責：柴川



ユネスコスクール世界大会 Student(高校生)フォーラム共同宣言

2014年11月7日採択

世界は、地球的規模の諸問題と各地域における諸問題を解決しようと多大な努力を続けてきました。戦争、紛争、環境、文化、エネルギー、食について着実な進歩を遂げてきましたが、今日にいたっても私たちはまだ多くの問題に直面しています。そのため私たち ASPnet の高校生は、様々な地域の背景を考慮しつつ、世界の重要な諸問題について更に知るために、学び合いの努力をしています。

2005年に始まった「国連 ESD の 10 年」は最終年を迎えました。この 10 年間で、私たちは、学び合いの大切さを知り、地球的諸問題に共同して立ち向かう姿勢を強めることを学びました。これは、世界の持続可能な発展の成功には ESD が必要不可欠なものであるという明確な信念のもとに達成されました。その結果、世界は私たち若者世代によるこれら諸問題への参画を、これまでにも増して期待しているように見えます。

2014年11月の今日、新しい ESD 世代の代表として世界 32ヶ国から私たち高校生はここ日本の岡山市に集いました。「日常生活と社会において持続性を阻害しているものは何か」、「持続性を促進するために重要なものは何か」というテーマのもとで、私たちは身近な問題から話し合いを始めました。その後、発展とは何かという話し合いにより、私たちはその多様性を確認しました。私たち高校生が先頭に立って、環境、文化、伝統、そして世代や国を越えて人を尊重していくという意見が述べられました。私たちは責任あるかたちで、様々な目に見える活動により出来る限りその輪を広げていくことが必要です。またそのためには、一人ひとりが自分の生活の中で小さな行動から始めることが大切です。たとえば、友達との協力やリサイクル運動、ボランティア活動への参加をとおして、ESD に興味・関心を持てるような楽しい学びの場をより多くの人に紹介していくことができます。そしてこのことは、若者の独創的な企画によって ESD や若者世代への興味を喚起することにもなるでしょう。私たちは共に行動できることがたくさんあることに気付きました。

これらのディスカッションに基づいて、高校生である私たちが現在と未来においてできることとなすべきことを模索して意見を交換しました。その結果、合意にいたったことは次の 5 点です。

1. 自分たちの力は無力ではないにせよ限られています。しかし共に助け合い、持続可能性について学び合う機会を大切にして、ESD について発信していきましょう。

2. 私たち高校生は、一人ひとりが地球に生きる一員としての自覚を持ち、環境と周りの自然を意識していきましょう。長期的な視点にたつて、学校で ESD が教えられるようになるために責任ある行動を明確にとりましょう。

3. 私たち一人ひとりが責任をもって互いのつながりを育てることで、様々な生活様式と文化と意見を共有して尊重しましょう。そうすることで、学び合いと知的な刺激を促進しましょう。

4. つながり合いとコミュニケーションを更に学ぶことで、平和と人権と、教育によって個人が成し遂げられるものを知りましょう。このことには男女平等と人権と平和と啓発が含まれます。これら全てにおいて、私たちは教育の果たす重要な役割を意識しましょう。

5. 上記の全てを私たち全員が意識して、個人の明確な目標を明らかにするよう全力を尽くしましょう

ネットワークの構図

The structure of our network



ネットワークでは、例年11月に実践交流会を開催し、各学校のESDについて共有し、交流を続けてきました。毎年の学習テーマは、持続可能性に関わり、高校生にとって最も身近で関心のある内容に設定しています。最近では高校生コアメンバーと学生スタッフ、先生方皆で年度当初に協議し、決定しています。

事前学習会は、実践交流会に関連づけて企画されます。これは実践交流会が単発イベントに終わってしまわないための仕組みです。加えて、年度末に何らかの形で各学校からの活動報告を提出しています。こちらも実践交流会での学びを、各学校での活動に活かしていくための仕組みです。

meet our team 23'

2023年 事務局 紹介



岡山県立林野高等学校

鐘森涼太・小山菜摘・岡田誠

局長を務めた鐘森は主に外部との連絡や活動計画立案を担当し、岡田・小山は主に生徒と同じ目線でともに活動・指導に当たりました。この役割分担に従いながら、時には臨機応変に様々な状況を乗り越えてきました。抜群のチームワークを発揮できた3人だからこそ、1年間を楽しく過ごすことができました！

岡山大学大学院教育学研究科

ESD協働推進センター

柴川 弘子

ネットワーク顧問



ネットワークの設立からそろそろ10年近いですが、地道に活動を継続し、次第に“熟成”されていると感じています。ベテランの学校・先生も新しい先生も、異動した先生も、高校生も大学生も、海外の方も、ごちゃまぜで活動できているのが魅力で、私もワクワクしながら学ばせて頂いています！

学生スタッフ

2023年度は、主に事前学習会や実践交流会の企画、運営のサポートをしました。高校生が主体的に学べるように高校生の企画をブラッシュアップすることが学生スタッフの役目だと考えています。

今後はよりいっそう交流会等を盛り上げられるように、学生スタッフ一同頑張っていこうと思います。



2023年度 学習テーマ



WHY防災？

今年度ネットワークで取り組むべきテーマについては、各学校の代表（コア・メンバー）がオンラインで集まり、学生スタッフのサポートのもと、幹事校がリードしながらテーマを絞り込んでいきました。各学校から、環境、ジェンダー、食、フェアトレードなど様々な切り口が出されてなかなかまとまらない中、それぞれの学校での実践に「防災」の視点を取り入れていく、これならいけるのでは？ということでもとまりました。

目的

「防災」について知識を学ぶのみならず、普段のユネスコスクールとしてのESDの取組にその視点を入れていくことで、それぞれの学校のオリジナルの防災学習が生まれるのではないかと、さらにそこから得た学びを他校とワークショップ形式で実践的に共有し、それぞれの学校に持ち帰り、学びを還元していく。このような学習のサイクルを創れるようにしていこうと考えました。

企画の課程 PROCESS



「一緒に物を作ったりするのは楽しい！」
 「ワークショップ形式が良い！」
 「知識も必要。誰かに話を聞いてみたい！」
 「他校の生徒ともっと話がしたい！」
 昨年のエコをテーマにした、ものづくりのワークショップが好評で、様々な反省点や参加者の声を活かすようにし、オンラインも活用してより綿密に企画を重ねていきました。

～6月中旬：学習会の日程・会場の決定
 ※岡山市SDGs・ESD推進課とも連携！各
 学校でのコアメンバー決定・顔合わせ会

7月中：事前学習と実践交流会のテーマと目的について、大学・顧問・幹事校での打合せ数回

8月後半：事前学習会の振り返り、
 11月実践交流会に向けて企画

9月・10月：各学校での防災学習実践を行いつつ、ポスターにまとめ、ワークショップ企画

11月：実践交流会でのポスター発表とワークショップ→各学校へそれぞれの方法で還元

3月：ニュースレター提出

2023年度 事前学習会

「防災×ESD×ユネスコスクール」

日時:8月23日(水) 13:00~16:00

於:岡山市勤労者福祉センター

5F 体育集会室

Pre-Learning Session



事前学習会では、前・矢掛高校ESD課／ユネスコスクール顧問（ネットワーク発起メンバー）で、現在は倉敷中央高校の高木潤先生を講師に迎えてのワークショップを実施。林野高校の生徒たちによるアイスブレイクを皮切りに、学生スタッフによるユネスコスクール・ESDに関するミニ・レクチャー、林野高校生による"なぜ防災について取り組むのか"のイントロを経て、高木先生自らが1997年の阪神淡路大震災での被災経験について当時の写真と共に語って下さいました。貴重な話を聞ける機会、一方通行の講演にしたいと私たちの想いもあり、生徒からの率直な質問を軸に全体を構成することになりました。講話を15分ごとの三部構成とし、1部終了ごとにグループで選んだ質問を提出。提出された質問から更に学生スタッフが厳選したものを高木先生に投げかける、という方式とし、生徒たちが真剣に話を聞き、考え、協議している姿が見られました。

Exchange Meeting 2023

DRR×ESD Workshop

“

他校の活動の発表やワークショップでの体験から自校でも取り組んでみたい活動が見つかりました。

防災を共通テーマに皆がオリジナルのワークショップやポスターセッションをしていて、新たな防災の知識が得られた。

ほかの学校のワークショップから自分では考えつかないような考えを吸収することができた！

防災についてたくさん話し合いができ、自分と違った考え方をしっかり学ぶことができた。

1年を通してもっと関われる機会を作ったらワークショップ自体ももっと質のいいものになると思った。

-実践交流会の会場で提出された各学校で代表的だった or 共有したい意見より抜粋

2023年度 実践交流会 「防災×ESD×ユネスコスクール」

日時：2023年11月18日（土）10:00～16:00

於：岡山大学自然科学研究棟 大会議室

プログラム：

- 10:00 開会 林野高等学校 竹内稔校長先生
- 10:10 アイスブレイク（林野高校生徒による）
ヒーローインタビュー
防災ワードウルフ
- 10:30 イントロ（学生スタッフによる）
「ユネスコスクールのスキルとハート"共創"について」
- 11:10 休憩・準備
- 11:20 ポスターセッション
- 12:00 午前の部終了・昼食休憩
- 13:00 防災ワークショップ
- 14:45 ワークショップ終了・片付け
- 15:00 振り返り
- 15:45 今後について
- 15:50 コメント
国際イスラミック大学マレーシア教育学部長 SUHAILAH B.HUSSIEN先生
倉敷中央高校 高木潤先生
- 16:00 閉会 おかやま山陽高等学校 原田一成校長先生



EXCHANGE MEETING

November 18th, 2023 @Okayama University



林野高校生徒による アイスブレイク

ヒーローインタビューにワードウルフゲームは大成功。すぐに皆が打ち解け、話しやすい雰囲気となり、しかもESDとして大事なスキルとハートのひとつである、相手の立場に立って考える、発言を良く聞く、といった態度を励ますような細やかな工夫が感じられるものであった。

ポスターセッション

各学校のESDの取組を1枚のポスターにまとめて発表しました。15分×2回。どの学校も防災の視点を取り入れた活動を様々に展開しているのと、多くの学校が地域課題に根差した活動を展開しているので、どの生徒にとっても他校の実践を知ることはとても新鮮だった模様。



反省点

100人超の高校生が入ると、最大級の広さを持つ講義室でもやや手狭となってしまう。15分は十分な時間で、2回のみセッションだと物足りないと感じる生徒もいた。今後はより多くの学校の発表を聞ける工夫が必要。



防災ワークショップ

設備に限りがある中で、グッズ制作、レシピ考案、ゲーム、アイデア出しなど多様な形式で開催されており、マレーシアの先生方も交えて楽しく実施できていた。

ESD協働推進センターのウェブサイトにも報告を掲載。

→<https://qr1.jp/zBV9et> またはQRコード



2023 岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク 実践交流会 防災×ESD×ユネスコスクール ワークショップ 内容一覧

岡山県立和気閑谷高等学校	岡山学芸館高等学校	岡山県立岡山一宮高等学校	清心女子高等学校	岡山県立矢掛高等学校	岡山龍谷高等学校
<p>新聞紙でできる！ 防災グッズ特集</p>	<p>SGDsカードを使って、ゲーム形式で防災意識を高める方法を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。私たちの力で、今、何ができるのかを、ゲームを通して考えたいと思います。</p>	<p>去年と引き続きシトラスリボンを作ります。シトラスリボンは家庭、地域、学校の3つが協力するという意味があるので、災害時にも重要なことです。皆さんで作りましょう。</p>	<p>自分の地域・学校周辺の地図を用いて、災害が起きたらどのような被害が想定されるか、生徒と一緒に考えていきます。その後、新聞紙を用いてスリッパを作ったり、牛乳パックを用いて笛を作ったりします。</p>	<p>災害を受けた方とそうでない方との間に「災害に対する気持ちの違い」があると知り、その温度差を埋めるきっかけを作れないかと考え、矢掛高校生と神戸社会福祉協議会と神戸の学生たちで作った「真備災害すごく」をやってみます。</p>	<p>お菓子のカバン、プレスレット、ネックレスで小さい子に防災意識を！！ 卵、乳製品、えび、かに、ナッツ類のアレルギーの子にも対応できるお菓子を使います。また、災害時におすすめのお菓子も紹介します。そして、実際にプレスレットを作ってみましょう。</p>
朝日塾中等教育学校	岡山県美術高等学校	岡山県立林野高等学校	おやか山陽高等学校	岡山市立岡山後楽館高等学校	雲雀丘学園
<p>ペットボトルを使ったランタンづくり。カラーセロファンを使って、飾りつけを一緒にやってみましょう。 ライトは見本用のみの予定です。作ったペットボトルは持ち帰りOKで、家の懐中電灯で試してもらいます。 https://ch-playlist.com/recipe_public/1150 御津地域で防災リーダー研修に参加した生徒による「ロープワーク」も実施予定です。</p>	<p>ゴミ袋を使ったレインコートを考えています。カラーセロファンで縛るだけで災害時でも簡単に真似できそうなものと考えています。</p> 	<p>オリジナルの防災ゲームを行いたいと考えています。5～6人を1チームとして、情報カードを1人につき5～6枚配布します。情報カードに書かれてある情報を口頭のみで交換し、最終的に一つの正解にチームでたどり着くというものです。情報は、家族の名前や家族構成、避難所の位置などを総集したものを予定しています。正解の避難所の配置を振り返ったときに、家族構成と避難所の位置に相関を持たせて、「小学生でも楽しみながら防災意識を高めることができます！」を目標にしています。</p>	<p>新聞紙を使用して、スリッパを作ります。3種類作成予定です。作成は5分程度です。</p>	<p>「マイタイムラインを作ろう！」ワークシート、各学校の防災マップを印刷しています。そのマップを見ながら、タイムライン（防災行動計画）を立てるワークショップを考えています。</p>	<p>【変更】非常食アレンジレシピ考案ワークショップ。常備している非常食の賞味期限が切れそうになる買い替えのタイミングや、災害時で同じ味に飽きてしまったときに、非常食がゴミとして捨てられてしまうことを防ぐため、アレンジレシピを考案してもらいます。いくつか例をお見せするので、参加者にも一緒にレシピを考えてもらいたいです。</p>



同じような活動でも他校とは違ったプロジェクトで良さが見つかって良かった。アイスブレイクで、他校との関わりがもて、楽しかった。

ワークショップ体験後に「楽しかったです!ありがとうございます」と言ってもらえて嬉しかった。また、マレーシア人の方に英語で説明するのが難しかったけど、自分の伝えたいことが伝えられたとき、一番やりがいを感じた。

ワークショップでは「防災」というひとつのテーマでもそれぞれの学校でアイデアが違って新鮮でした。たくさんの方が自分たちのワークショップにも来て下さり楽しかったです。

今日、初めてこの交流会に参加して、たくさんお勉強ができました。ポスターセッションでは、多くの活動を知ることができ、すごく大規模な活動をされているところもあってすごいなと思いました。自分たちの高校についてもたくさん知ってもらうことができたなと思います。実際に作ったりして見て、多くの学びを得られました。来年も参加したいと強く思いました。

今日の実践交流会を通して、防災について様々な方法や体験でふれることができ、より防災についての知識も深めることができました。嬉しかったことはアイスブレイクなどを通して色々な人と交流を行い、友達が増えたことです。

他の高校の人と交流して最初は緊張したけどワークショップなど楽しくできて、防災のことや他校はどんな活動をしているのかが知れてよかったです。ワークショップでマレーシアの方が来てくださり、一緒にゲームをして、英語を使ったりして他国の方とも交流・コミュニケーションがとれて、とても楽しかったです。



まず、多くの高校生の皆さんが、災害時や避難所で取るべき行動を示せていると感じました。

1. 一部のグループは、お湯や缶詰めの食事を直接食べるなど、最小限の調理方法で食事を準備することに焦点を当てていました。生徒たちは災害時に最小限の調理器具で食事を準備する能力を身に付けていますね。
2. SDGカードで防災に焦点を当てたグループもあり、災害時の緊急事態に精神的に準備する能力を高めるのに役立つと思います。災害時のさまざまな緊急事態を表すカードゲームを使用することで、状況を想像し解決策を見つける手助けができます。
3. 新聞紙からサンダルを作るグループも、最小限の能力で準備することを目指しています。作成されたサンダルは避難時に使用することができますね。
4. 子供の鎮静方法に焦点を当てたグループは、子供向けのお菓子をカラフルなバケツに入れることで、災害避難時に子供たちが楽しい気分を保つ方法です。この活動は、避難所で子供たちの前向きな雰囲気を保つ方法を知っている生徒たちから好評のようでしたね。
5. ゴミのプラスチック袋からレインコートを作成する生徒たちも、緊急事態の中でもそこに存在する材料をうまく活用する能力を示していますね。
6. 学校で消防訓練を行い、さまざまな方法で結び目を作成する練習をするグループもいました。これは緊急時のスキルを開発するのにきっと役立ちますね。

※イリナ先生からは英語で作成されたニュースレターに1つずつコメントを頂きました。

(美作高校)

- このニュースレターから、生徒たちが非常に限られた状況や施設などで生存するために必要なスキルを示すことができると感じました。生徒たちの高い共感力、将来志向性、戦略的で解決指向の考え方が表れています。
- こうした活動は、生徒たちが災害や地震の経験を持つ人々から学び、実体験に基づく経験を提供します。災害に実際に経験を持つ人々と直接話をする機会があることは、現実的な学びの経験を提供します。

(朝日塾中等教育学校)

- この活動は、学生が被災者に直接貢献する活動を創造するという「リーダーシップ」を示しています。共に生きることの価値を示していると感じます。実践交流会は、生徒たちが防災について共同で学ぶためのプラットフォームを提供していますね。異なる地域の異なる学校からの一部のローカルな知/暗黙知は、災害時の行動を促すでしょう。そして、イベント前、中、後の生徒たちの振り返りは、新しい社会的規範を作り出し、社会のさらなる変革/変容に役立つ学びの経験を提供していると感じます。

(ノートルダム清心女子高校)

- この実践交流会は、ワークショップを通じて、スキルと災害の文脈で一緒に行く必要がある「緊急性の感覚」を共同的に創造するという目標を達成していると言えます。
- 生徒たちは創造的にさまざまな活動を生み出し、他の生徒の関心、知識、および災害予防への参加を向上させるために取り組んでいますね。この活動は、高次の思考—創造性、災害避難のシナリオに基づく分析—を示しています。生徒たちはまた、災害の経験の豊富な人々を招待して、災害時の強いコミュニティのつながりの重要性を学んでいますね。生徒たちは、将来の災害への備えを向上させるために、災害の予測不能な性質について学んでいるのですね。

(おかやま山陽高校)

- 生徒たちの現実の生活が食品ロスの問題に直接影響を与えていますね。生徒自身による活動というのは本当に良い学びの源となりますね。

※岡山でのESDの状況を概観して頂くため、実践交流会以外にも岡山市立後楽館高等学校、ノートルダム清心女子高校の2校のユネスコスクールと、ESD拠点である公民館—岡山市立一宮公民館、岡山市立御南西公民館等を訪問しており、それらの感想も含まれています。

岡山県への訪問では、日本における革新的な教育と地域参加のアプローチから学ぶ貴重な機会を得ました。この経験は大変に啓発的であり、特に我々自身の教育の枠組みと地域参加戦略を向上させるために、マレーシアの文脈に適応すれば大いに有益であると考えられるいくつかの重要な示唆を得られました。

1. 探究型学習（IBL）モジュール：岡山で観察した教育アプローチの中でも、高校レベルでの探究型学習（IBL）の実施が際立っていました。生徒たちは予め定義された知識の受動的な受け手ではなく、学習の旅の中で積極的な参加者でした。彼らは彼ら自身の興味に基づいた探究プロジェクトに取り組み、革新的な解決策や創造物を生み出していました。この方法は、批判的思考、創造性、主題に対する深い理解を促進し、生徒が理論的知識と実践の適用を結びつけることを可能にします。マレーシアでもこのようなIBLモジュールを教育システムに組み込むことで、学生の学び方を革新することができると考えます。マレーシアの生徒たちが自分の興味を追求し、現実の問題に解決策を開発する機会を与えることで、イノベーターや問題解決者の世代を育成することができます。これにより、学生たちは自身の学習の直接的な影響と関連性を見出すことで、参加意欲とモチベーションが向上する可能性もあります。
2. 地域参加：岡山で観察されたもう一つの称賛すべき点は、教育プロセスへの地域の広範な参加でした。各地域にあるコミュニティ・ラーニング・センター、または「公民館」は、地元コミュニティによって開発された独自のニッチな分野を持ち、そのメンバーの特定のニーズや興味に合わせた学習と開発プログラムを提供していました。この地元主導のアプローチは、教育の提供がコミュニティにとって関連性があり有益であることを保証し、参加度と学習成果を向上させます。マレーシアでもこのモデルを採用することで、地域のニーズにより適合した学習センターを強化することができると考えます。地域コミュニティがこれらのセンターの開発に参加することで、提供されるプログラムが受け入れられ、地域の発展に積極的に貢献することができます。
3. 施設の利用可能性：岡山の施設の利用可能性も注目に値します。私が訪れたすべての施設は、あらゆる年齢層と能力の人々を収容するために設計されていました。この包括性により、コミュニティの誰もが参加し、学び、貢献することができます。マレーシアは、教育と地域開発の取り組みを強化するために、岡山からいくつかの重要な点を学ぶことができます。まず第一に、マレーシアは、地元コミュニティが教育や地域施設を特定のニーズや興味に合わせて形成するように、岡山で観察された地域主導のアプローチを採用することができます。この包括性により、誰もが参加し、学び、貢献することができます。施設の利用可能性を向上させ、地域の発展に関与することで、マレーシアは、すべての個人を尊重し、力を与えるより包括的な文化を育成することができます。

結論

岡山県への現地訪問から得られた洞察は、単なる観察にとどまらず、マレーシアの教育と地域フレームワークを向上させるために適応できる具体的な戦略です。探究型学習の原則を採用し、地域の参加を促進し、すべての施設での利用可能性を確保することで、より包括的で革新的で、関与度の高い社会を創造することができます。この訪問を通じて、可能性を垣間見るだけでなく、我々自身の発展のための政策に向けて努力すべき基準を設定することができました。



Suhailah先生からのコメント

2023年11月18日は私にとって忘れられない日となりました。その日、岡山大学教育研究院で実施された実践交流会兼ワークショップに参加する機会を得ました。柴川弘子先生から私たちのチームを招待して頂いたことは大変喜ばしいことでした。テーマは防災であり、マレーシアは日本から多くを学ぶことができるため、それに関する知識、スキル、および実践を知ることが期待できました。

ワークショップは、高校生のDRR（災害リスク低減）およびESDプロジェクトを簡潔なプレゼンテーションを通じて共有するセッションと、実践的な活動の2つのパートに分かれています。セッションはすべて大学の学生によって管理されていました。これにより、大学生がESDに関する知識とファシリテーションスキルを活用できていると考えます。私はワークショップの両方のパートに参加し、特に高校生のプロジェクトのプレゼンテーションに感銘を受けました。高校生はプロジェクトに多くの努力を払い、DRRとESDの研究スキルを最大限に活用して印象的なプレゼンテーションを行いました。彼らのアイデア、内容、および革新性に対する創造性に驚かされました。これは、彼らが豊富なコミュニティ参加を行いながら、徹底的で詳細な作業を行ったことを反映しています。

一方、実践的な活動では、彼らのプロジェクトの一部を「試す」機会を得ました。特に、学生が開発したDRRボードゲームが気に入りました。このゲームは、学生がDRRで得た知識を表示し、同時にその重要性を認識するための取り組みを行いました。興味深いことに、生徒たちは過去の災害の破壊と死者の影響さえも、私のような外部の人間に啓蒙することができました。彼らは、単なるゲームを通じて過去の経験の影響と、DRRの良い実践がコミュニティをどのように変革したかを成功裏に示しました。

ワークショップ以外にも、コミュニティ・ラーニング・センター、避難所など、DRRの主要地域を訪れることで多くの知識を得ることができました。また、高校への訪問も、教育アプローチとその学生の学習への影響を理解する上で示唆に富んだものでした。岡山の高校生が提案する研究のクオリティは、特にアイデアの形成において、マレーシアの大学生よりも自立したレベルです。これは、岡山（日本）の高校で活用されている問いに基づいた学習アプローチの性質と品質に起因しています。したがって、このアプローチは学生プロジェクトの持続可能性を推進し、それが大学教育の段階で追求されることを促進します。

確かに、DRRとESDだけでなく、探究学習(IBL)を通じた生徒の学びを向上させる方策について、知識とスキルを多く得ることができました。私はこれまでにHikmah Pedagogyという哲学的な問い合わせアプローチを広く使用して、問いのコミュニティ (CoI) を発展させてきましたが、「実践的な問いのアプローチ」を見出だし、CoIを「行動する」から「その状態になる」段階に移行させるための効果的な方法をまだ発見していませんでした。この研修旅行と訪問は、それを実現するための多くの考えとアイデアを提供してくれました。私は柴川先生に心から感謝しています。実践交流会への参加と研修の経験は、私たちの研究と学校・大学での探究学習のアプローチの改善のための基盤となりました。

国際イスラミック大学マレーシア(IIUM)は、Uslah in Actionという社会連携型授業を全学生が履修し、SDGsの課題解決に向けて努力しています。また、岡山市と同様、RCE（国連大学認定のESD推進拠点都市）ゴンバック広域圏として加盟し、ESDに関しても東南アジア地域で最も盛んな地域のひとつになってきています。3名の先生は、クアラルンプール市内中心部にある国立バトゥムダ高校と連携し、同高校の探究学習を学生と共に支援する取り組みを始めています。私たちも8月に初めて高校と大学を訪問し、様々な共通点を見つけています。今後、お互いの実践をより良いものにしていくために、協働できることを模索していきたいと考え、まずは11月の実践交流会を視察して頂きました。その後、12月にはオンラインで林野高校とバトゥムダ高校の生徒が学習発表を行いました。ユネスコスクールの生徒の皆さんにとって、より豊かな学びの機会を提供するためにこの国際的なネットワークをどう活かすべきか、今後も一緒に考えていきたいと考えています。（柴川）



学生スタッフの活動紹介

UNESCO Week 2024

ユネスコスクール全国大会 & ユースフォーラム報告



学生スタッフもESDやユネスコスクールについて学ぶ機会を持ち、全国・海外のユースと繋がれる機会を積極的に取り入れていこうと考えています。

2023年度は1月19日ー21日にかけて開催されたUNESCO WEEKに参加しています。

次世代ユネスコ国内委員会のメンバーでもある川上寛人さんは裏方スタッフとして、山下優佳さんと木崎達也さんの2名は一般参加者として参加し、様々な学びを得ています。大会の振り返りをこちらに掲載します。是非ご一読頂き、学生スタッフの想いや学びに触れて下さい。

山下優佳（岡山大学グローバルディスカバリープログラム3回生 矢掛高校出身）

1日目 ユネスコウィーク シンポジウム

（“Ladies and gentlemen,”というあいさつから始まったのが少し驚きでした。多様なジェンダーや性的指向を考慮する意味で少しどうなのかなとふと思いました。）

41の国と地域からの参加ということでとてもわくわくしました。特にローカルの焦点を当てていたChan Yu Namさんの発表に興味を持ちました。何か活動を始めようとする際に、必ずしもみんなが同じ目標を持っているわけではないというとき、同じ関心を持った人たちから始めようとする考え方に納得しました。また、“Travel local instead of abroad, buy local product, join local communities”というフレーズが印象的でした。私たちは何かしようとするとき遠いところを見がちですが、まずは自分の手の届くところから考えることの大切さを学びました。“this is my thing, not like this is your thing”すべてこれに尽きると思います。

2日目 ユネスコスクール全国大会

様々な学校のESD教育の事例を聞くことができ大変良い経験になりました。今ある学校教育、カリキュラムにどのようにローカルな話題を組み込めるかという観点に一番興味を持ちました。日本では、文部科学省から学校がルール縛りされている面があります。そんな中で、まだESDなどの活動が正当に評価されていない日本で、学校教育をより良くしようとチャレンジするような余裕がない教師の方も多いためです。何か学校教育に疑問を持って変化を加えようとしても反対されたりすることもある意味事実です。例えば、先日、教科書を使わずに授業をしているなど、学習指導要領に従っていないなどと批判を浴びている学校がニュースで取り上げられていました。こんな周りの目が厳しい中で、社会問題や地域問題をどのように学校教育に取り入れ、あくまでも自分たちの問題であるという当事者意識を忘れさせないかということがとても重要かつ難しい問題であるように思いました。また、ネパールの例にもあったように、独自の文化であるJank ceremonyを数学と結び付けて学習するといったような、一見一つの科目単体や地元文化の一部に見えても、他との相互性を見出し、それらを教育として提供することで、自然とローカルとのコミュニケーションが成立するという考え方がおもしろいと思いました。

（20日の最後の総括の部分で、「先生が正しい情報を提供する立場に立つべきだ」とおっしゃられていました。情報があふれかえっている今、正しい情報など存在するのでしょうか。誰の視点で見てその情報を正しいと判断するのか、疑問に思いました。それよりはむしろ、どうやって情報を批判的思考も踏まえて見分けるのかを訓練したり、何か情報が与えられたときに自分で一度立ち止まって考えたり、様々な視点で情報を捉えることができるように促したりすることができる先生が必要だと感じました。）

3日目 ユースフォーラム

まず、前半部分について、「次の日生きるか死ぬかという人たちがUNESCOの気候変動とカリサイクルとかそんな話してられない」とおっしゃられていたのが印象的でした。私たちが今どこに立って話をしているのかということを再認識させてくれました。確かに、世界的に西洋的な考え方がいわゆる“普通”とされ、開発やESDに関して目指すべき目標ともされている世界で、この会で触れるようなトピックについて考えることができる立場にいるということを知覚することは、世界をどう捉えるかという意味でも大切なことだと思います。また、「未来を担う子供が」という主語をよく聞きますが、特に、地球温暖化等の気候変動に関して、今まで地球の中心を担っていた大人の責任も忘れてはいけないように思います。今や、若者への次世代教育などとかっこよさげな言葉でまとめられていますが、大人への教育不足、大人の無関心にも提唱を鳴らすべきだとも感じます。

後半の分科会は特に興味深かったです。自由の森学園からの高校生の話と先生の話聞く限り、若者の活動力やアイデア、創造性には可能性がたくさんあると感じました。しかし、時間がないなど、“大人の事情”やあらゆる制約が若者の障壁になっている部分もあると感じました。なぜなら、彼らがおっしゃられていたように子どもは政治的発言力と指揮の欠如に直面するからです。それをうまくサポートもしくは一緒に取り組んでいけるような場所づくりが学校でできると良いと思います。また、かつては社会の変化、変革にどのように対応するかに焦点が置かれた学校教育だったのに対し、今は、変革を作る側に立つことを視野に入れた教育が導入されていると聞きました。何か子ども達が行動し、それが成功した時に自信を得て次のアクションにつながるということも話されていました。それにはとても賛成します。しかし、生徒の失敗を失敗として教える学校教育や環境が自信を失わせてしまうかもしれません。そこでどう先生がフォローアップできるかがもう一つ大切なポイントであるように感じました。最後に、アウトプットする場所が欲しいという意見がありました。アウトプットする場所として図書館や博物館、公民館などの地域コミュニティが挙げられました。資金や場所、身体的状態等人それぞれアビリティやアクセシビリティが異なると思うので、いかに学校の教室内でもアウトプットできる環境をつくれるかということもESDにちなんで重要なポイントだと思いました。

会の終盤のユースフォーラムでは、様々な意見を同じユースから聞くことができ、とても興味深い話し合いの場となりました。最後の、教育、科学、文化に分けられた付箋の傾向から、私たちの関心が教育にあることが明らかでした。自分の専攻に関係なく、教育はだれもが経験してきたこと、経験していることであるためだと思います。また、教育と一言で言っても、若い世代だけで終わらないのが教育の魅力の一つです。ただ、確かに、一つのトピックにとどまらず交差性を教育の中にも取り入れていくべきだという話の後で行ったアクティビティであるのに、科学と文化についての付箋が少ないことを考えると、やはりまだ単一的なものの見方に頼っている傾向にあると思います。次世代ユネスコ国内委員会の方がまとめても話されていたように一つ課題が浮き彫りになったのではないかと思います。

会全体のまとめとして、大人、子供といった二項対立ではなく、ユネスコ、気候変動、教育、どの分野においても、双方、また他とのコラボレーションが大切であると感じました。また、社会は一握りの重要人物が担っているのではなく、私たち一人一人によってのみ動いていくということを忘れてはいけないと思いました。

木崎達也（岡山大学教育学部3回生 芳泉高校出身）

1日目：「第15回ユネスコスクール全国大会」のパネルディスカッション、ポスターセッション、分科会（◎ GIGA×ESD：デジタル時代のユネスコスクールを考える）に参加しました。

全国各地の「ユネスコスクール」でどのような取り組みが行われているのかについて知ることができた一日でした。ユネスコスクールの出身ではない私にとって、実際の活動事例を知ることができたことは「ユネスコスクール高校ネットワーク」の学生スタッフとして活動を行っていくうえで、具体的なイメージを持つことにつながったと感じています。また、どの取り組みも学校や地域の特色を活かしたものになっており、教員志望の私にとっては大変興味深く、とても学びのある時間でした。

特に午後の分科会では、教育現場で課題となっている「デジタル活用」について、文部科学省の「GIGAスクール構想」担当の方や専門家の方などのお話を伺いました。分科会に参加して、デジタル活用の視点は高校生を対象とするイベント（事前学習会・実践交流会）を運営するうえでも大切であると改めて感じました。近年、このGIGAスクール構想によって、高校生も一人1台のノートパソコンやタブレット端末を持つようになり、それを授業や探究学習に活用できる環境が整えられました。このことを踏まえて、例えば「アナログ」と「デジタル」のどちらの方式がどの企画と相性がよいかを考えたり、成果を効果的に共有・発信する方法を模索したりして、今後のイベントの企画・運営に活かしていきたいと思いました。そのような意味で、この分科会はこれからの時代の活動の在り方を考える貴重な機会でした。

2日目：「ユースフォーラム」（分科会は「教育分科会」：「気候変動問題への対応と持続可能な開発のための教育（ESD）の活性化」）に参加しました。

午前中の活動報告では、私と年齢の近い方々が日本だけに留まらず世界に活動の場を拡げて活躍されていることを知り、「自分がユースとしてやりたいことは何か」や「自分にどのようなことができるのか」ということを考えるきっかけの時間になりました。また、午後の分科会では、教育分野でのESD実践の研究結果や実践の紹介があり、「教育」「ESD」という切り口からどのようなことができるのか、その現状と展望について知ることができました。

その後の『未来への宣言』策定に向けたワークショップ・グループディスカッションでは同世代の方たちと交流することができ、有意義な楽しい時間を過ごすことができました。ワークショップは、自分が参加した分科会の内容をグループ内で共有するところから始まりました。そして、その内容を踏まえて、自分がこれから取り組んでいきたい「アクション」を付箋紙に書き、それを「教育」「文化」「科学」といった各分科会のテーマごとに分類して模造紙に貼っていきました。私は「子どもたちの想像力や行動力を生かせる場と機会をつくりたい」という夢を書きました。このほかにも、「アウトプットする場をつくりたい」「交流や対話の機会を大切にしていきたい」「多様な価値観に触れていきたい」といった内容を書いている方もいました。どれも活動を行っていくうえで、意識していく必要があることだと感じました。

活動歴も興味ある分野も取り組んでいることも異なる人たちが同じテーブルを囲み、集い、話し合うことから生まれるものがあると感じられたワークショップとグループディスカッションでした。グループのメンバーは自分と同じ大学生の人たちばかりだったので、自分もやりたいことを成し遂げられるように活動をがんばっていきたいです。

2023 Newsletter



今年度の「防災×ESD×ユネスコスクール」をテーマにした事前学習会・実践交流会での学びと、それらを各学校での活動にどう活かしていくのかについて1枚のニュースレターにまとめ、3月15日に提出しました。

これは、やや単発的になりがちであった学習会・実践交流会をより長期的なものにしていったり、一部の生徒だけでなく、学校全体に広げていったりする上での、ひとつの方策として提案されたものです。

事前学習会で初めて震災の話聞いた生徒たち、実践交流会でのワークショップを展望しながら、それぞれの学校の特色や地域課題に寄り添いながら、どんな活動を進めたのか。実践交流会での学びを次にどう活かそうとしているのか、などの内容を盛り込んでいます。

1. 岡山県立和気閑谷高等学校
2. 岡山学芸館高等学校
3. 岡山県立一宮高等学校
4. ノートルダム清心女子高等学校
5. 岡山県立矢掛高等学校
6. 美作高等学校
7. 岡山龍谷高等学校
8. 岡山県立林野高等学校
9. おかやま山陽高等学校
10. 岡山後楽館高等学校
11. 朝日塾中等教育学校

和気閑谷の 防災 アクション

WAKESIZUTANI's
actions
for disaster prevention

もし和気町で大地震が
起きたらどうする???

What actions should we do when
HUGE EARTHQUAKE happen in wake

交流会後に実施した
取り組みを紹介します！
作成者：佐々木彩乃 大杉照美
柏内澪央 渡会蓮 浦上大智
ラガスカ ブレイデル ジョン



和気高の周りは
自然がいっぱい！



金剛川



和気富士

和気高を
避難所として
活用すべき！

土砂災害が起きて
居場所がなくなる人が
続出するかも・・・



避難所運営ゲーム

総合的な探究の学習「閑谷學」
防災ゼミのみなさんと和気高を避
難所として活用するシュミレーシ
ョンゲームを行いました！来年度
は全校で取り組みたいです。



実践交流会で感じたのは、「身近な場所で、リアルに
災害の起こる恐怖感」と「準備の大切さ」でした。
十分な備えをして、みんなで身を守るための行動を！



岡山県立和気閑谷高等学校



平島三世代交流会

～地域の防災について考える交流イベントの開催へ～

西日本豪富の被災地平島で、高齢者と子どもの防災教育実施



もし〇〇が起きたら...？

「地震や津波、洪水が起きた時、どうする？」
子供、高校生、高齢者が混ざったグループに分かれて話し合ってもらいました。

西日本豪雨で実際に浸水を経験している平島地区。

「何が大変だった」「何に困った」「その後の対策」など、具体的な例が多く出てきました。話し合いの最後には、「避難場所」「持っていくもの」などについてグループごとに発表してもらいました。

必要なものがない...！そんな時には！

災害時に役立つ防災グッズを参加者の皆さんと作成しました。

今回のイベントでは新聞紙を使ったお皿・スリッパを作成しました。

「必要なものがその場にはない。」

そんな時、その場にあるもので代用することができるんだ。ということについて、実際に防災グッズを作成し、楽しみながら学ぶことができました。



今あるもので解決するには...？

災害が起きた時、避難した場所に「今あるもの」でしか、問題へ対応・解決することができません。

そんな状態になった時、どのように考えたらいいのか、普段から練習しておく必要があります。使える物の名前が書かれたSDGsカードシャッフルし、各グループが引いた3枚を使ってどのように解決へ導いていくのか、ゲーム形式で考え、最後に発表しました。



岡山一宮高校

UNESCO school

学んだこと

企業と連携したり資格を取ったり一年間に多くの活動をしている高校があり、行動力が大切だと学びました。

また、災害グッズの作成や和風の建築様式を防災に活かすなど様々なアイデアがあり、取り入れたいと思いました。

また、自分たちから新しいことをやっていくことが大切だとわかりました。

行ったこと

- ・フードロス削減のため家庭で余った食材を持ち寄って料理するサルベージパーティーを開いた
- ・文化祭でフェアトレード商品を販売した
- ・保育園の子ども達に向けてフードロスに関する発表
- ・全国ユース環境大会の中国大会に出場し優秀賞を獲得



全国ユース環境活動発表大会

中国地方大会

令和4年12月26日(月)

TKPガーデンシティ広島駅前大橋

今後の活動について

今後は他校の活動を見習い、企業と連携して活動を広めていきます。また、今年はフードロスとフェアトレードを中心に活動したので、災害など新たなテーマで幅広く活動していきたいと思いました。

What we learned

At the networking pre-event, we heard stories from victims of the Great Hanshin-Awaji Earthquake.

Workshops were held by each school to **think and share ideas** about what we can do for disaster prevention **together**.

What we felt

By listening to people who have experienced the disaster, we **felt a sense of crisis and urgency**.

Now we understand how important it is to act before a disaster occurs. And we thought we need to **visit and see what happened in our town after a disaster**.



**UNESCO
SCHOOL
MEETING**
2023.11.18

Seishin Girls' High School

NEWS LETTER



SHARE

2024.3.10

At the event, we did **a quiz about disaster prevention**. We tried to engage kids and give them some knowledge. We also made lanterns and cards which is written evacuation center.



FEILD WORK at Minagi

2024.2.11

In 2018, flooding resulted in heavy rain in the town. We had a lecture from people who had experienced it and learned **how important strong community connections are**. Also, we found there is an unpredictability of an actual disaster even though we prepare. **Their voices** should be made use of for our preparation.

NEXT YEAR

Concerned about what happens in the world



矢掛高等学校

～矢掛高校の防災活動～



2024年
川上瑛太 高橋幸来
題府咲羽 坂本莉乃



コノヒトカン1000缶プロジェクト

第2回コノヒトカン1000缶プロジェクトで「探究ちーむ」が受賞した企画である若者の防災意識を高めるため「Remember Heavy Rain Festival (RHR)」を11月10日に開催しました。このイベントでは、西日本豪雨で地域の消防団員として活躍した坂本さんの話を聞き、災害のリアリティを学びました。矢掛中学校の生徒も招待し、高校生と中学生が防災について共に考える場を設けました。また「コノヒトカン」を用いておにぎりを作り、災害時の思いを共有しました。この活動を通じて、災害への備えと互いの絆を深め、地域社会への貢献意識を高めました。

今後の取り組み

矢掛高校では、防災リーフレットの作成を通じて防災グッズの整備、ハザードマップと防災マップの作成に取り組み、理想的な避難訓練の実施を目指しています。これらの活動を通して、生徒たちの防災意識の向上と実際の災害時の対応力を高めることを目標にしています。

防災×恋愛映画「いつもいつでも」

3年生有志による卒業制作短編映画「いつもいつでも」の完成披露上映会が2月28日にされました。生徒、教員、地域住民を含む約50名が参加しました。この映画は全て生徒たちで制作されたことで参加者から多くの賞賛を受け、感動の声が多数寄せられました。またメディア関係者も多数訪れ、取材が行われたことでさらに注目を集めました。監督を務めた生徒は、「高校生活の最後に素晴らしい活動ができた」と感謝の意を表しました。



事前学習会・実践交流会



Mimasaka High School

3年: 細川太良・野村康仁
 2年: 西尾侑・福田梨乃・山本夏妃
 1年: 松原柚姫・松尾春花・澤野琴音・横部恋・氏平圭



事前学習会・実践交流会を通して新たに学んだこと

- 事前学習会で学んだこと>
- ・いつ災害が起こるかわからない
- ・防災対策はしておくこと
- ・防災が身近にあるということ



- ＜実践交流会で学んだこと＞
- ・私たちに出来ることがある
- ・高校生だから出来ることがある
- ・ワークショップを通していろんなことが学べた
- 防災マップの便利さ、身近なもので防災グッズが作れる

「防災」に関連した取り組み

- 私たちは能登半島地震への募金活動を行っています。
- 放送で呼びかけ、放課後に校門前で募金活動を行っています。

事前学習会で聞いた実際に地震を経験した方のお話し。このお話しを聞く前は私たちは実際にこんなに大きな地震を体験したことがなく実感がありませんでした。ですがお話しを聞いてみて少しですが実感が湧き、地震への考え方が変わりました。

1月1日能登半島地震がありました。
 実践交流会で、私たちに出来ることがある。
 高校生だから出来ることもある。
 ということを学び、それを活かそうと考え、始めたのが募金活動です。



今後どんな活動を展開する予定か

- 能登半島地震への募金活動を続けようと思います。
- 学校外で行おうと考えています。(マルイなど)

他にも能登半島地震への活動が出来ればいいなと思っています。
 今までに挑戦したことのない活動をしたいと思っています。





Preliminary study session Practical exchange meeting



Mimasaka High School

3rd grade : Hosokawa Taira • Nomura Yasuhiro

2nd grade : Nishio Yuki • Fukuda Rino • Yamamoto Natsuki

1st grade : Matsubara Yuzuki • Matsuo Haruka • Sawano Kotone • Yokobe Ren • Ujihira Kei



Preliminary study session

→ <What we learned at the preliminary study session >

- You don't know when a disaster will occur.
- Take disaster prevention measures.
- Disaster prevention is close at hand.

<What we learned at the practical exchange meeting >

- There are things we can do too.
- There are things you can do because you are a high school student.
- We learned many things through the workshop.
→ The convenience of disaster prevention maps and the ability to make disaster prevention goods using everyday items.



Initiatives related to disaster prevention

→ We are conducting fundraising activities for the Noto Peninsula Earthquake.

→ We call for donations through broadcasts and conduct fundraising activities in front of the school gate after school.

Stories from people who have actually experienced an earthquake that I heard at the preliminary study session. Before hearing this story, we had never actually experienced an earthquake this big, so we didn't really feel it. However, after listening to what he had said, I started to realize it, and my way of thinking about earthquakes changed.

On January 1st, there was an earthquake in the Noto Peninsula.

There are things we can do because we're high school students.

Having learned this at practical exchange meetings, and thinking of putting it to good use, we started a fundraising campaign.



Future activity schedule

→ We would like to continue our fundraising activities for the Noto Peninsula Earthquake.

→ We are thinking of doing it outside of school. (Supermarket nearby etc.)

We hope we can do other activities to help with the Noto Peninsula earthquake.

We would like to try an activity that we have never tried before.



防災×ユネスコスクール×ESDの取り組みを通して

私たちの活動内容

岡山龍谷高校では、RLAという探求の授業で、それぞれが研究したいことに取り組むことができる。今年度では、青色の明度が記憶力に与える影響や、ボランティアと自己肯定感の関係性についてグループに別れて研究を行った。また、学校のある笠岡市の交流事業である、マレーシアの学生との交流も行った。



8月23日事前交流会

事前学習会では、実際に災害を体験された方の話を聞いて、いつもはあまり身近には感じていない『災害』や『防災』を身近に潜んでいるものだと改めて感じた。また、災害が起きた後の選択肢は残る、離れるの2つではないと知ることができた。自分たちに出来ることをしていくことが大切なのだと改めて知ることができた良い機会となった。

11月18日実践交流会

実践交流会では、子供が防災に関わるきっかけを作るため、お菓子のカバン、ネックレスを制作した。小さな子供達に災害に対して怖いというイメージだけを持つのではなく、自分から災害を学び、防災意識をもって欲しいと考えている。お菓子であればカバンを楽しみながら作ることが出来ることに加え、防災グッズを中に入れることでより、身近なことだと感じて貰えると思う。

今後の活動について

- ・実際に保育園などに出向き、ワークショップを行うことで、『災害』や『防災』を身近なものだと感じてもらうこと
- ・他校の取り組みから食べ物、ジェンダー、ゲーム、新たな防災グッズなど様々な視点からもう一度防災を考えること





～誰でもできる！ゲームで学べる！防災学習～ Learning Disaster Risk Reduction from Elementary School Age

【実践の振り返り】

The Importance of Consideration Learned from Games in Evacuation Shelters

林野高校は、防災グッズに関する発表と防災について学べる避難所配置ゲームのワークショップを行いました。

ポスターは簡単に作れる防災グッズの紹介や賞味期限が切れた乾パンの加工などを他校の人に紹介しました。他校のポスターセッションでは、災害などで被害にあった時、被災者は何を必要としているか、非常食を買っていたが、使わず賞味期限が切れてしまったとき美味しく食べる方法などを紹介していました。学校の場所によって災害の影響や対策のやり方が違って、発表の内容はとても勉強になりました。

避難所配置ゲームでは、ゲーム感覚で避難所の問題に関心を持ってもらうために体育館を避難所と想定して課題を解決していきます。チームで協力して情報カードを元に事前に設定してある正解を導き出し、そこに配置されている理由をチームで考えます。ゲームを通して全員の要望を叶えることは難しいが、過ごしやすい環境にするにはどうすればよいのかと考えることができました。



【マレーシア バトゥムダ高校とのオンライン交流】

Promoting activities of High School in Okayama to the World

12月にマレーシアのバトゥムダ高校とのオンライン交流を行いました。交流では主に、英語を用い、林野高校からは今年度のユネスコスクールでの活動を報告し、バトゥムダ高校は「平和教育」「文化の受容」に関するプレゼンテーションをしてくれました。作成したスライドは全て英語で一度日本語で作った後に英語へと翻訳活動をしました。また、交流以前に何度も発音を練習しました。マレーシアと林野高校との「探究方法」「発表方法」は大きく異なっており、マレーシアの方々は、一人ひとりの主張を動画にまとめていました。その内容は自国の文化を維持しながら他の文化も受け入れるという考えが浸透していました。多様な文化があるからこそできた説得力ある活動でした。

普段使い慣れていない英語での発表はいつもより難しく、緊張しました。今回の経験は、今までにないもので、英語を使った「コミュニケーション」「質疑応答」の場面が多々あり、英語をもっと活用し、こういった機会でもっと上手くコミュニケーションがとれる英語力を身につけたいと思いました。



【今後の活動予定】

Awareness of "DRR" for the Future

実践交流会で行った避難所配置ゲームを小学生に実践してもらい、小さい頃から防災に対する関心をもつことで災害などが起こったときに他人事ではなく、防災に対して意識を向けられるようになってもらいたいです。さらに、能登半島地震のように災害はいつ起こるかわからない。そのために事前にできる対策を知っている人を増やしていきたいです。



防災×フードロス×ユネスコスクール

一般社団法人コノヒトカン代表理事の三好千尋さんに出前授業をしてもらったことをきっかけに、本年度からユネスコ部では、食品ロスや貧困問題の解決に向けた「コノヒトカンプロジェクト」に取り組んでいる。今年、小学生を中心に啓発活動を実施した。防災について取り組む中で、これからは「防災食」としての可能性を探究したいと考えている。

昨年9月23日に「高梁川流域SDGsフェスタ2023」というイベントがあり、一般社団法人コノヒトカンの三好さんと遠本さんと一緒に参加した。このイベントで来場者にコノヒトカン販売したり、フードロスを減らすための取り組み内容を説明した。一般の方に、コノヒトカンを知ってもらえるいい機会となった。



昨年の9月に倉敷さすていなリバイバルというイベントに参加した。コノヒトカンを広める活動としてユメカンという取り組みを行った。ユメカンとは、子供たちに缶詰に親しんでもらおうとした取り組みである。そしてユメカンは、世界に1つだけのタイムカプセルだ。イベントでは、たくさんの人に楽しんでもらうことができ、コノヒトカンの知名度を広めることに成功した。

昨年の8月27日、「サルベージ調理体験会」に参加した。食料廃棄を減らすことを目的とし、1人1人家で余った食材を持ち寄りカレーを作った。この活動を通して、参加した小学生に、食材を買いすぎないことや賞味期限が短い商品から「手前取り」という消費者としての心得を伝えた。



食べ物の大切さを小さな子供たちにも伝えたいと思い、「食べ物の神さま」という紙芝居を作った。少しでも話に親しんでもらいたいと考え、日常的な場面を組み込み、小さな子供たちにも分かりやすいようにした。また、神様のキャラクターもそれぞれ特徴をつかんだものを作った。上記のことを踏まえ、一からストーリーやキャラクターを考えて、披露の場に向けて練習を重ねた。紙芝居を見てもらった結果、子供たちもとても喜んでくれて、少しでも多くの子供たちに食品ロス問題、ついて知ってもらうことができた。



骨髄バンク登録推進活動

白血病などによって骨髄移植が必要な患者さんのために、私たちはドナー登録者を増やしたいと考える。自分たちにできることは何かを考え、説明員養成研修と実地研修を経て、骨髄バンク説明員の資格を取得した。骨髄バンクの課題である10代、20代の登録者の数を増やすためにも、全国の高校で骨髄バンクドナー登録会の実現を目指している。

『ボランティアアワード2023』

全国に骨髄バンクの活動を広めるために、ボランティアアワードの全国大会に3年連続出場した。また、2023年のテーマは防災であったため、その時に新聞紙スリッパのことを知った。その新聞紙スリッパの作り方について説明したいと考えている。

ユネスコスクールから学んだこと

事前研修会や実践交流会様々な取り組みを知ることができ、新たな考えや気づきが多く生まれた。参加した高校の数だけ、活気ある魅力のある取り組みがあり、とても勉強になった。特に、貧困や福祉の問題には自分たちでも取り組んでいたため、全く違う視点の取り組みや考えに刺激を受けた。また、自分たちの取り組みを知ってもらうこともでき、私たちが他の高校の取り組みに感心したように、多くの人に自分たちの取り組みの良さが伝えることができたと思う。そして、このように多くの学びがあったユネスコスクールを通し、今まで考えもしなかった新しい切り口の考え方を学びたいと思います。

Disaster prevention × Food loss × UNESCO School

Last summer, Ms. Chihiro Miyoshi, Representative Director of Konohitokan, a general incorporated association, came to our school to give a class on food loss and poverty. That's the reason why our UNESCO club has been working on the "Konohitokan Project" to solve food loss and poverty issues. We have told elementary school students the importance of food. We also want to use Konohitokan for disaster prevention.

On September 23rd last year, we participated in an event called "Takahashi River Watershed SDGs Festa 2023" with Ms. Miyoshi and Mr. Tomoto from Konohitokan. At this event, we sold cans to visitors and explained the details of how to reduce food loss. It was a good opportunity to introduce Konohitokan to the general public.

We wanted to convey the importance of food to small children in an easy-to-understand way, so we created a picture story show called "God of Food." We wanted to make the story as familiar as possible, so we incorporated everyday scenes to make it easy for young children to understand. We also created characters for each of the gods which have their own characteristics. Based on the above, we came up with the story and characters from scratch and practiced for the performance. As a result, the children were very happy to see the picture-story show, and we were able to let as many children as possible know about the food loss issue and the importance of food.

On September 16th last year, we participated in an event called "Kurashiki Sastina Revival". We helped Ms. Miyoshi with Yumekan project, which is an activity to familiarize children with canning. The can that the children made is special because it is the original time capsule for themselves. We could make many people enjoy and succeeded in spreading awareness of Konohitokan.

On August 27th last year, we participated in an event called "Salvage cooking experience". We made curry with ingredients which each participants brought from home, with the aim of reducing food loss. Through this activity, we taught the participating elementary school students how to behave as consumers. For example, we should not to overbuy foodstuffs and should take products with the shortest expiration dates (te-mae-dori).

Bone Marrow Donor Registry Promotion Activities

We are engaged in bone marrow donor promotion activities to make as many people as possible aware of the "bone marrow bank" and to increase the number of registered bone marrow donors for patients who need bone marrow transplants for leukemia and other conditions. We have received training and on-the-job training to become an explainer for bone marrow donor. To increase the number of teenagers and 20s registered, which is a challenge for the bone marrow donor bank, we aim to realize bone marrow donor registration meetings at high schools across the country.

『Volunteer Awards 2023』

For three consecutive years, we have participated in the national Volunteer Award competition to promote the activities of the bone marrow bank in Japan. We also learned about newspaper slippers at that time because the theme for 2023 was disaster prevention. We would like to explain how to make newspaper slippers at the workshop.

What we have learned from UNESCO School

We have learned about various initiatives, which led to many new insights, from the high schools which participated in UNESCO school. In particular, since we had been tackling poverty and welfare issues ourselves, we were stimulated by the initiatives and ideas from completely different perspectives. We believe that we were able to let people know about our own efforts and convey the merits of our initiatives to many people, just as we were impressed by the initiatives of other high schools. We would like to explore the possibilities of Konohitokan, which we are currently focusing on, as a disaster-prevention food. We would also like to learn about a new angle of thinking that we had not considered before.



私たちのテーマ『誰一人取り残さないジェンダーの視点で考える防災』

Disaster Prevention from a Gender Perspective that Leaves No One Behind』

日頃の地域の姿が災害時にそのまま避難所の姿に反映されます。

普段から、社会にある男女の格差や見えないものを含めた差別をどれくらい小さくすることができるでしょうか。

◎学んだこと

●8月23日 事前学習会

- ・災害を身近に感じることができていなかったと気づけた。
- ・実際に被災された方の話を聞くことで、テレビのニュースや新聞の記事などがすべてではないのだと感じた。

●11月18日 実践交流会

- ・もし後楽館が避難所になったらと、ジェンダーと年齢層に焦点をおいて構想することで、避難所を運営する視点で話し合うことができた。
- ・他校の活動から、私たちにはなかった防災についての考え方や視点を学ぶことができた。
- ・新たなアイデアを重視し、自ら提案することを学べた。
- ・社会の問題を自分事としてとらえることができた。
- ・災害への危機感を高められた。



◎防災に関する今後の取り組み

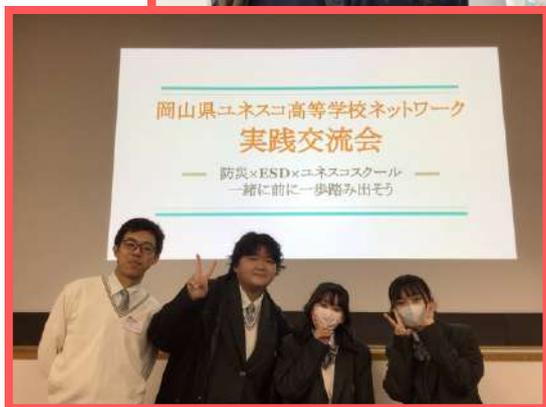
- ・私たちが実施した「マイタイムライン」作成の活動に加え、他校の実践も参考にしながら、探究の授業の研究活動に取り入れる。
- ・簡易トイレや衛生用品を1階よりも上の階に置くなど、備蓄品を校舎内のどこに置くのが適切かを話し合っておく。
- ・校舎のどこに何があるかをわかりやすく示したポップで見やすい地図を作り、生徒の目に入りやすいロッカースペースや昇降口に貼る。
- ・地域住民に後楽館の避難所としての不安な点を聞き、解決策を話し合う。
- ・地震や津波、洪水の影響で通れなくなる場所があることを、避難経路を歩き、危険な場所を把握しておく。



朝日塾中等教育学校 ユネスコスクール NEWSLETTER



2024年3月



ユネスコスクールに 参加して

事前学習会で阪神・淡路大震災の体験談を聞き、どのように防災に取り組めるのか、災害が起きたらどうすればいいのか、などを詳しく学ぶことができました。

- いつでも逃げられるように、自分が持てる量の防災グッズを寝具の近くに置く
- 地震が起きたら、すぐに高台へ逃げる

他校の高校生と防災グッズのワークショップで、自分では思いつかなかったような新しいものもあり、グッズを楽しく作りました

参加後の活動

地域の防災活動「みつ防災キャンプ」にリーダーとして参加し、心肺蘇生法や消化器の使い方などを子どもたちにレクチャーしました。



編集：本間光海

今後の予定

地域活性化ボランティアを高校生が主体となって企画・運営しています！

- ①音楽と青空市（5月開催）
 - 地域活性化とポイ捨てゼロを目指す
 - 企画運営は高校生中心
 - 自分たちで宣伝して、たくさんのキッチンカーやステージ出演者を集めました
- ②御津金川 七夕みたま祭り（7月開催）
 - 地域活性化と金川出身のラストサムライの啓発
 - 地元のロータリーや団体と協力して企画中

**災害が起こったときに備えて
地域の団結力を高める**

朝日塾中等教育学校

〒709-2136 岡山市北区御津紙工2590

TEL：086-726-0111 / FAX：086-726-0400

サイト：<https://m-asahijuku.ed.jp/>





Asahijuku Secondary School
**UNESCO SCHOOL
NEWSLETTER**



March 2024



What we learned from attending to UNESCO school

At the pre-study session, we heard about the experiences of the Great Hanshin-Awaji Earthquake and learned how we can get involved in disaster prevention and what we should do to prepare for the disasters:

- Place the emergency supplies you can carry near your bed so that you can escape at any time.
- If an earthquake occurs, run to higher ground immediately.

These are just some examples of the things that we learned. At the workshop about emergency supplies with other high school students, we enjoyed making supplies, some were created by other students, and we would have never been able to come up with those supplies by ourselves!

Before attending to the Debriefing session

We participated as a leader in the Mitsu Disaster Prevention Camp, a local disaster prevention activity, and lectured children on CPR and how to use a fire extinguisher.



Translated by Miyu Ichiishi

Upcoming events

We are planning volunteer activities for community revitalization operated mainly by high school students!

(1) Ongaku To Aozoraichi
(held in May)

- Aiming for community revitalization and zero littering
Planned and managed by high school students.
- We advertised the event by ourselves and attracted a lot of people to it!

(2) Mitsu Kanagawa Tanabata Mitama Festival (held in July)

- Local revitalization and raising the profile of the Last Samurai from Kanagawa
- Planning in cooperation with local Rotary Club and other organizations

**Increase community cohesion to
prepare for future disasters**

Asahijuku Secondary School

2590 Mitsu Shitori, Kita-ku, Okayama 709-2136

TEL : 086-726-0111 / FAX : 086-726-0400

<https://m-asahijuku.ed.jp/>



ユネスコスクールの「味」

倉敷中央高校 高木 潤
2023年3月

持ちより家庭料理の味見は楽しい！？

高木潤先生は、2015年に岡山県ユネスコスクール高校ネットワークの創設に貢献された先生であり、学生時代に阪神淡路大震災で被災されたり、矢掛高校での西日本豪雨災害のご経験をお持ちであることなどから、「防災」学習を切り口にESD・ユネスコスクール活動を発展させていく上で、講師として事前学習会・実践交流会に招待し、参加されてみて、またユネスコスクール以外に赴任された立場からの感想を寄稿頂きました。



最近「料理」をよく作っている。

コロナ禍「ステイ・ホーム」の流れの中で、我が家7人の「家事分業体制」も徐々に確立してきており、その中で私が「食事担当」に抜擢されたのがそのきっかけだ。以来、ネットのレシピを見様見真似で悪戦苦闘の毎日が続いてきたのだが、ごく最近はその「料理」の「面白さ」にも少し気づき始めているようだ。様々な食材や調味料、調理方法によって引き出される様々な「味」の奥深さ。それらがどう絡み合い一つのハーモニーとしての「料理」に仕上がっていくのか？かなり興味深い領域が今の私の目の前には広がっている。

そこで今回は、そんな「料理研究家」の私から、ユネスコスクールの「味」についての投稿を行ってみることにした。私自身はこの「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク」とは、10年ほど前の設立当時からのご縁なのだが、その初期メンバーの「生き残り」的な感想も含め、どんな「味」がこのユネスコスクールの活動には含まれているのか？皆さんも一緒に考え、味わっていただければな、と思う。

では、ご賞味あれ。

1) いろいろな「味」の混在 ～ご当地料理・持ち寄りバイキング・パーティー～

まずこのネットワークの活動で一番大きなところは、色々な高校の「味」が混ざり合っていて進んでいるところだろうと思われる。県内に10校ぐらいあるユネスコスクール高校は、その所在場所も東西南北バラバラで、都会もあれば田舎もある。勉強が盛んな高校、運動が盛んな高校、ボランティアが盛んな高校と、その高校のタイプ（特徴）も様々で、それぞれの高校の「生存戦略」が違うので、それらの高校同士に明確な「接点」や「共通点」もあまり無い。本来ならば交流する機会が極めて少ないだろうこの10校だが、ただ「ユネスコスクール」であるというたった一つの「接点・共通点」によ

り、何の違和感もなく自然に交わることが出来ている。そこがまずは非常に面白いところだと思う。こういうケースって有るようで無いような「レア・ケース」ではなかろうか、と思うのだ。

さてこの「交流活動」の様子を「料理」の世界に置き換えて考えてみると、これは「バイキング形式」のパーティーに似ているということに気づく。しかもこのパーティーに参加するメンバーは、それぞれ自分の郷土の自慢料理を一品ずつ「持ち寄り」ながら参加している。それをみんなに振る舞ってワイワイ盛り上がり、というのだ。ここでのポイントは「振る舞う」という部分。これは何かの「料理コンテスト」で行われるような「この自分の料理が一番だ！」という「勝負」のために持ってきた「料理」というのではなく、もっと気軽に「まあ、これ美味しいけえ、食べてみられえ〜」とみんなにオススメしたいから持ってきた「料理」であり。その「振る舞い精神」や「オススメ精神」というのがこの会の根底にはある。それがこの会の面白いところ、良いところだと感じている。

実際にこの「持ち寄りバイキング・パーティー」に参加してみると「ほ〜、県北のホルモンうどんって初めて食べましたわあ！」とか、「県南の牡蠣おこって何が入ってるんっすか？」とか、「ああ、そこにレモンを絞ったら味がギュッと締まるんっすねえ、今度やってみよ」とか。「他校」の取り組みの「味」に驚いたり、刺激を受けたり、参考になったり。まさに「勉強になるわ〜」という経験がたくさんある。「なるほど「自校」と「他校」の「味」ってこんなに違うものなのか？」とそこで初めて気づいたり、「ああそこの「味」は一緒、一緒！」とちょっぴり安心してみたり。特に私の場合は「公立」に入社したこともあり、あまり普段からは接触機会のなかった「私立」の方々とこの「バイキング・パーティー」でお会いすることができ、いろんな特徴のある「味」を堪能させていただいたことがとても楽しかったし面白かったと思っている。

もちろんこの「ユネスコスクール交流」以外にも、学校には部活の「試合」や「発表会」「コンテスト」など「他校」と交わる機会はたくさんあるのだが、ただそういう交流の多くは「競争」が前提になる場合が多い。それはそれでとても面白い交流なのだが、ただその際にはどうしても「他校=敵」の関係性があるため、どうしても「手の内」や「腹の中」は隠さざるを得ないことも多く…。ちょっと残念な部分もあったりする。その点で「勝ち負け」を超え「損得」を超えたところの「競争ではない協奏」を目指している「ユネスコスクール」の交流会は、他の交流会では味わえないような独特の「味」を楽しめることにもなっているのだと思う。

2) そこまでガッツリ手間ヒマをかけない「味」 ~チャチャッと対応できる厨房の技~
食材にこだわり、何年もの修業を経て、しっかり手間ヒマかけて作られた料理の「味」には素晴らしいものが宿っている、というのはよく分かる。ただ、たまたま冷蔵庫の中に入っていたものでチャチャッと手際よく作る「チャチャッと料理」の中にも、それはそれで「うまい！」と思える部分は沢山あるだろう（いろんな意味で）。この「ユネスコスクール高校ネットワーク」には、発足当初からその辺りの「手間ヒマ」のバランスをよく考えようという指向もあった。そしてその部分、いわば「コスパ・バランス」とでも言うべきところもユネスコ活動の一つの優れた「味」だと思っている。

そもそもここでの活動は、「ユネスコスクール以外の高校」ではやっていないことを「プラスα」の形で実践していく活動なので、ともすれば「教員」にとっても「生徒」にとっても力が入り過ぎれば、その分他が背負っていない「負担」をどんどん自分で背負い込んでしまうことにもなってしまふ。その「プラスα負担」が他の活動に支障をきたすようなことになれば、そもそもユネスコ活動自体の停止にまで追い込まれることにもなってしまふわけで…。その「活動限界」を見据えながらの「バランス配慮」がとても重要な部分になる。

我々の活動が「絵に描いた餅」ではなく、実際に「食べられる餅」になるためにも、その現実的な「コスパ感覚」をユネスコ活動現場で訓練していくことはとても大事なことだ。限られた時間、限られた素材で一定以上のクオリティーの「味」を作り出すための「手際」や「工夫」の訓練。そこには一人前の「料理職人」になるために、毎日厨房で特訓している「見習い弟子」のイメージが重なる。人手も時間もふんだんに使いながら納得のいく「巨匠の一品」を作ろうとするのではなく、まずはどんどん入ってくる注文にチャチャッと応える「厨房の品々」をちゃんと作り上げる。その技術を磨くためにも、あえて「手間ヒマ」をかけないという選択をするのは重要なことで、その「味」を感じることが出来るのも魅力の一つだろう。

3) 身近な先輩たちの家庭の「味」 ～姉ちゃん兄ちゃんが作る料理～

「食」のプロたちが作り出す「出来上がった料理」ばかりを食べていると、その出されてくる素晴らしい料理の数々が「当たり前」になり過ぎてしまい「味覚」が麻痺していくような現象が起こることもあると聞く。飽食の現代における「外食病」とでも言うべきそんな状況の中で、たまに家で姉ちゃんや兄ちゃんが作ってくれた「家庭の味」が何だか凄く「しっくり」くることもあるだろう。「ユネスコスクール高校ネットワーク」の大きな魅力の一つには、その「家庭の味」を皆さんの「先輩」にあたる「大学生」が進んでサポートしてくれているところもあると思う。高校時代に同じようにユネスコスクールで学んできた「先輩」たちは、決して「プロ」のような巧みな技は持っていないかもしれないが、自分の経験も踏まえて「こんな感じが良いかもな？」と色々な若者目線でのアレンジを加えてくれており、「高校生」にとっての身近な「味」をうまく提供してくれている。恐らくそこには「教育のプロ」になってしまった「教員」では出せないような「先輩」ならではの素敵な「味」が含まれており、そういう「家庭の味」を味わえるのは、他のお店にはないこの店だけの特徴と言っても良いかもしれない。「大学生」にとっても「高校生」にとっても「教員」にとっても、それぞれの立場でそれぞれの「学び」がこの「味」の中からは出てきているような気もしている。

4) 特定のレシピに縛られない自由創作の「味」 ～今日のオススメ・おまかせメニュー～

基本的にユネスコスクールの活動は、誰かに「これをしなさい！」と指示されてやっているものはないので、それぞれの学校が独自判断で動くのが原則だ。それぞれが「これはやった方がイイかな？」「こんな活動は面白いかな？」と考えて動く。だからそこには何か特定の「縛り」があるわけではないし「ノルマ」もない。あるのは「良い方向へ」というそれぞれの関係者が持つ「自由な良心」に基づいた感覚だけだ。

この状況は「料理」のお店で言えば、「今日のオススメ・おまかせメニュー」に何となく似ている気がする。店の主人（料理人）は、その季節や地域の特徴によって違ういろいろな食材や料理方法の中から「今日はこれが一番美味しい！」と思えるものを選択し、「今日のオススメ・おまかせメニュー」としてその日のお客さんに提供していくものもある。そこには、果たしてこの料理が「今日のお客さん」に合うものなのか？喜んでもらえるのか？という不安もきっとあるだろう。ある意味「料理人」の腕やセンスが試される瞬間だ。この「ガチ勝負感」がその料理人を「育てる」ことは間違いないだろう。実はユネスコ活動のいろいろな場面には、そういう「ガチ勝負感」があるというのも私が薄々感じている「味」だ。誰かから「これをしなさい！」と指示されていないからこそ、自分らで判断してやる。そこから生まれてくる「ガチ勝負感」。誰かから「言われてやりました」ではないからこそ、それが感じられる。そのことはこのユネスコネットワーク全体の「まとめ役」をしてもらっている毎年の「事務局」の話にも通じる部分があると思う。

「岡山ユネスコスクール高校ネットワーク」の運営は、発足から今まで、毎年県内10校の中の1校にその年の「事務局」を順番で回してやってもらうという方式がとられている。去年はA高校だったから今年はB高校、来年はC高校というように、あらかじめ「事務局」を回していく順番を決めており、その年に回ってきた「事務局」は一年間の活動の連絡調整や準備を行う中心、全体の「まとめ役」になる。当然その年の「事務局」の高校には「プレッシャー」もかかるだろう。特にこの「ユネスコスクール」の活動というのは活動自体が「珍しい活動」でもあるので、「前例」や「慣例」があまりなく、「参考になるもの」や「聞きに行ける相手」がとても少ない。よく分からない闇の中をソロソロと手探りで進んでいく状況。当然「事務局」の「不安」も大きくなる。ただ、そこをどう乗り切るかという部分に、一つの「成長点」「転換点」「醍醐味」のような側面があるのもやはりあるわけで…。その辺りを「今日のオススメ・おまかせメニュー」の話で説明すれば、こんな具合だ。

毎日「とんかつ定食」を準備するよう店の「師匠」から指示を受けてきた「見習い弟子」。最近ではとんかつの揚げ具合やキャベツの千切りの細さ、ソースの仕込みなど、ある程度まではできるようになってきていた。が、さっき突然「おい、明日の「オススメ・おまかせメニュー」はオメエでいぞ」と「師匠」から言われビックリ！「え～、どうしよう…？」と不安がる弟子。そういう状況を想定してみよう。ここでの彼の頭に浮かんでくる選択肢は、次の3つぐらいに絞られるのだと思う。

- ア) 師匠の「味」を崩さぬよう過去のメニューに沿った料理を作ることに力を注ぐ
- イ) 自分の「味」としてモノになりつつある「とんかつ」に絞った料理に力を注ぐ
- ウ) よく分からないので師匠や先輩にいろいろな「味」を聞いて回ることに力を注ぐ

どれにするかは難しい選択だ。明日の仕込みに間に合うのかも不安だし、果たしてこの3つの中から選んでしまっても良いのかも不安だ。あるいはもしも「理想」が言えるのならば

- エ) その季節の旬や客の好みに合わせた「味」を創り出すことに力を注ぐ

という選択肢を作りたいのだが…ただ、まだそこに至るまでの腕とセンスは自分にはないことも分かっている。だからとりあえずは、今できることとしてのア～ウの選択肢。何とか明日の「オススメ」までには間に合わせねば、と…。恐らくこのどれをとっても「正解」なのだろうと私は思う。たぶん「自分で選んでいる」ということが、ここでの「正解」なのだ。「今日のオススメ・おまかせメニュー」は、「作り手本人」が誰かから「言われて作ったメニュー」なのではなく、「自分で選んで作ったメニュー」というところがその「味」のミソで。この「料理」には、「作り手の選択」した「味」を楽しみたいということが大きな魅力になっている。だからア～ウまでの「選択肢」をまずは「作り手」が自分の中で用意して、その中のどれかを「選んだ」ことでその「味」は既に出ていくわけだ。「味」が出ないのは「選ばない」場合や指示が出るのを「待っている」場合。それは「オススメ」ではない。

「事務局」の問題も実はその辺りがポイントになっているような気もしている。順番で回ってきたという、全く望んでもみなかった「受け身」の状態から始まっている「事務局」の担当役割。よく分からない暗闇の中でとにかく事を進めなければならないが、誰かからの指示が出るまで待っていても誰も指示は与えてくれない。誰か「上の人」がいるわけではない「ユネスコスクール」では、自らが方向性を創り出さなければならない厳しさもあるのだが、ただ具体的にはそこに何らかの「選択肢」を作ることができれば、まずはその第一歩も踏み出すことは出来るだろう。

- ア) 毎年の活動を崩さぬよう過去の計画に沿った運営に力を注ぐ
- イ) 本校が得意とする活動に寄せた取組になるように全体呼びかけや連携に力を注ぐ
- ウ) よく分からないので岡山大学ESD推進室や前の事務局の先生に相談することに力を注ぐ

もしも可能ならば第4の選択肢として

- エ) 今の社会課題や生徒の感覚に合うようなテーマに絡められるように力を注ぐ

という「理想型」もあるのだろうが、その部分までいかになくとも、とにかく何かを「選ぶ」ということが出来れば、おそらくそこが重要な部分。それが「ユネスコスクール」の「味」の一つなのだと思う。このことは「事務局」になると味わえる「レアな経験」とも言える部分なのだろうが、そうした「成長点」「転換点」「醍醐味」といったものが「味わえる」という感覚があれば、この活動ももっと楽しいものになるのかもしれない。

さて、このネットワークの「事務局」もそろそろ県内10高校を一周し、「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク」もいよいよ次のフェーズに入ろうとしている昨今。時代は変わり、人も変わり、組織も変わっていくけれど、「ユネスコスクール」が持っている「変わらない価値」って何なんだろう？というのが、ここから先、ある意味ポイントになってくるのではないかなとも感じている。そういう風に難しい言い回しで言うと分かりにくいのだが、要は「なんでこんなことやってんの？」というところにまつわる話になる。「料理研究家」の私風に言うなれば、「何でもみんな料理なんかしてんの？」という感じの問いだろう。それは毎日生きていくための「栄養」を摂取するためにという答えもあれば、料理を囲んで「ワイワイやれる場」が欲しいからという答えもある。「美味しいもの」はやっぱ欲しいジャンという答えも返ってくるだろう。そうしたもののどこにも「料理」の「味」は絡んでおり、「ユネスコスクール」の活動でもどんな「味」が重要かという議論は出てくるだろう。

「知識」や「仲間」や「面白さ」など、いろいろな「味」が絡み合う「ユネスコスクール活動」。これからも「いい味」出てるなあ、という活動になっていくことを祈念いたしております。

この報告書は、JSPS科研費 21K13574：研究課題「ESD教師教育に向けた実践共同体を形成促進する多角的学習モデルの開発」の助成を受け、研究成果の中間報告として発行しています。

「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク 2023報告書」

編著：岡山大学大学院教育学研究科 ESD協働推進センター 柴川弘子

発行：岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク／岡山大学大学院教育学研究科 ESD協働推進センター

岡山市北区津島中3-1-1

(086)251-7723

発行日：2024（令和6）年 5月14日

編集協力：

岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク

顧問の先生方

岡山県立倉敷中央高等学校 高木 潤先生

次世代ユネスコ国内委員会 教育WG 川上 寛人（学生スタッフ）

岡山県ユネスコスクール高校NW 学生スタッフ

国際イスラミック大学マレーシア (IIUM)

Irina Safitri Zen 助教 Izawati Tukiman 准教授 Suhailah Binti Hussien 教育学部長



Contact Us



<https://edu.okayama-u.ac.jp/esd/>



+81 086-251-7723



hirokoshibakawa@okayama-u.ac.jp

